



▲東京(原宿)

▲本祭

## しまむた 四万夢多が国内外で四万十町をアピール

町内在住者など約 100 名で構成される四万十町のよさこいチーム「四万十町よさこい踊り子隊四万夢多」が国内外で四万十町をアピールしてきました。

昨年の第 61 回よさこい祭りで「審査員特別賞」を受賞した四万夢多は、チーム結成 3 年目となる今年、8 月 9 日から 11 日の 3 日間、高知市で開催された第 62 回よさこい祭りに前夜祭から参加しました。



▲台湾

また、8 月 30 日には東京で開催された「原宿表参道元氣祭スーパーよさこい 2015」、10 月 17 日には台湾新竹県で開催された国際イベント「2015 台湾国際客家カーニバル及び国際花鼓芸術祭」に高知県代表として参加し、国内外で四万十町をアピールしてきました。台湾の博愛中学校では、よさこい教室を開催し、生徒約 30 名に正調よさこい踊りを指導した後、一緒にパレードするなど交流を深めてきました。



## 興津八幡宮秋季大祭

10 月 15 日、県の無形文化財に指定されている興津八幡宮秋季大祭が行われました。

当日は花台も練り歩き華やかな祭りとなり、大勢の見物客が見守る中、最大の見せ場である宮舟と神輿の攻防が小室の浜と興津八幡宮の境内で繰り広げられました。

豊漁か豊作か、結果は両者健闘により引き分けとなりました。

今年も宮舟の担ぎ手として町内外から約 40 名の方にお越しいただき、盛大に開催することができました。



## 四万十川 ウルトラマラソン開催

10 月 18 日、第 21 回四万十川ウルトラマラソンが開催されました。

当日は、午前 10 時にこいのぼり公園上を 60 km の部がスタート。青空のもと多くのランナーが、ゴールの中村高校を目指して四万十川沿いを駆け抜けました。

	出走者数	完走者数	完走率
[100km]	1,648 人	1,238 人	75.1%
[60km]	536 人	458 人	85.4%

### 季節の風景 11月

## 龍馬、生誕百八十年

土佐の裕福な郷土に生まれ、青年期に江戸へ剣術修業に向向き、帰郷後の二十五歳のとき土佐勤王党に加盟します。翌年に脱藩して江戸で勝海舟に弟子入りし、神戸で幕府が開いた海軍操練所の塾頭に収まるも、塾の閉鎖とともに薩摩藩の庇護下に入ります。その後、独立して亀山社中を設立し、対立関係にあった薩摩・長州両藩を實利で結び、薩長同盟の締結に尽力します。その翌日、京都の寺田屋で幕吏に襲撃され、療養を兼ねて妻のお龍と薩摩へ新婚旅行に。そして、土佐藩から脱藩の罪を赦されま

す。また、「大政奉還」を土佐の藩論として献策し実現させるのですが、一か月後、暗殺されることとなります。

「薩長同盟」「大政奉還」の立役者にして、明治維新最大の功労者。開明的な思想を持ち、日本の新しい夜明けを導いた英雄。郷土の志士、坂本龍馬の生涯です。

龍馬は今年、生誕百八十年を迎えます。生年は天保六年十一月十五日(一八三六年一月三日)、没年は慶応三年十一月十五日(一八六七年十二月十日)で、旧暦でみると誕生日と死亡日は同じ十一月十五日です。今年日は日曜日なので、各地で賑わうのではないのでしょうか。

なお、太陽暦では来年一月三日が生誕百八十年になります。



### 今月の 人オキナリ

## 有機農業に対する消費者の理解を深めていきたい

国内で有機農産物を表示・販売するには、日本農林規格(JAS)の認証が必要になります。その認定にかかる業務を行う認証団体が、国内には数多くありますが、そのひとつが特定非営利法人・高知県有機農業認証協会です。事務所は黒石の県立農業担い手育成センターにあります。

宇和川さんは、9 月からこの事務所で様々な業務を任されています。元々は四万十市出身。お父さまが約 30 年前に、四万十市(当時の西土佐村)に大阪から I ターン。有機農業を始めた。そこで、宇和川さん

川さんは生まれました。その後、一家は当時の中村市に居を移し、そこで長年にわたって有機農業を続けてこられました。地元の高校を卒業した宇和川さんは、お父さまが切り盛りする高知県有機農業認証協会の手伝いを経験しながら、数年間スーパーマーケットやホームセンターなどでアルバイトをして暮らしていましたが、今年、その認証協会に正職員が必要となったため、事務手伝いの経験のある宇和川さんがその職に就くことになりました。

有機農業の認定という専門的な知識と見識が必要な業務ですが、ごく自然に入っていた時からそうでしたが、私が生まれた時には、父がすでに

有機農業をやっていたので、有機農業や環境保全、また安全な食品などについて、改めて自分の頭の中に取り入れるという感覚はなく、自分の周りに当たり前のようにそれらがあつたという感じでした。

現在、有機農業という言葉をもっとの人が知るようになりたいのですが、実際の消費行動はそれほど伸びていません。宇和川さんはそんな実態を何とか好転させたいと思っています。「まだ、具体的な方法は模索中ですが、消費者の理解をもっと深める努力をしていきたいと思っています」

生産や販売の現場だけでなく、有機農業を取り巻くあらゆる分野で少しずつ世代交代が進んでいます。



宇和川 諒さん (八千歳)